

會津能楽會會報

第9号

発行者
会津能楽会
責任者
湯田眞佐弘

〒969-5311
南会津郡下郷町
大字豊成字倉241

- [2] [3] 演能の記録(30年度)
- [4] [5] 演能の記録(元年度)
- [6] グループ紹介(第4回)
- [7] 能のひびき(随想他)
- [8] [9] 根ざし行く育成委員会活動
- [10] 寄稿文
- [11] その他
- [12] 役員名簿
その他情報
編集後記



能楽堂竣工十周年に寄せて

会長 湯田眞佐弘

積雪のない異例の正月を迎えて、雪に苦しめられる会津にとつては、何やら得をしたような気持ちのする年となりました。

会津能楽会会長を仰せつかつて一年が経過、役員の皆様、会員の皆様には一方ならぬご協力とご支援を賜っておりますことに、心より厚くお礼申し上げます。

さて會津能楽堂が竣工して十年になりました。それまでは、毎年恒例の薪能は大名行列の出陣式が行われる鶴ヶ城特設舞台を借用して演じられたり、春と秋の演能会は会津若松文化センターのステージに能舞台を組んで公演しておりました。その労力と苦勞は並大抵ではありませんでした。

能楽は武家の式楽としてお城の公的な行事には欠かすことのできない芸能であったと聞いております。従つて、会津藩でも城内に能舞台が常設されており、折あるごとに上演されていたものと思われまふ。こうした伝統が底流をなす会津能楽会では、能舞台を持つのは宿願でした。機運が充ち一般社団法人会津能楽堂建設協会の設立、能楽堂建設に向けて運動が具体的に展開され、私もその一理事として微力を添えさ

せていただきました。南会津郡内、会津若松市内はもとより県内各地に至るまで建設基金の出資を募金して廻つたことを懐かしく思い出します。平成二十一年八月、ついに竣工を迎え、舞台上で大勢の方々和祝謡を謡つた感激は昨日のように思い出されます。

あれから十年、建設運動に携わられた会津の能楽愛好家の方々の情熱とご努力に改めて感謝と敬意を表したいと思ひます。会津能楽会の演能はその後、この舞台上で上演され大勢の観客を動員することができるようになりましたが、毎年会員数が減少していくのを止めることができないうこと、会長として忸怩たる想いであります。能楽をもっと身近に関心を持つてもらうように念願するところでありまふが、その意味において、今後、会津能楽会に課された期待の重さを感じているところです。

能楽堂が建設されたことによつて会津能楽会は一つの転機を迎えました。そして十年が経過して再び新たな転機を迎えたような想ひをしております。転機が発展の転機となりますことを祈りつつご挨拶いたします。



竣工十周年を迎えた会津能楽堂

演能の記録

—平成三十年〜令和元年

平成三十年

春の演能

五月二十七日(日)
会津能楽堂

「藤(半能)」



前シテ	渡部 静子
後シテ	佐藤 文江
ワキ	星 幹男
ツレ	猪俣 隆二
大鼓	坂内 庄一
小鼓	折笠 成美
太鼓	一条 正夫
笛	寺田林太郎

地謡	堀 篤子	浜崎 幸子
	渡辺ヒロ子	佐藤ヨシカ
	増井 典子	栗城 幸子
	山垣美枝子	古田 豊子
後見	平山 昇	洪川 兼三
	長谷川桂子	



第三十二回 会津鶴ヶ城新能

九月二十三日(日)
会津能楽堂

「鶺鴒」



前シテ	佐藤ヨシカ
後シテ	平山 昇
ワキ	洪川 兼三
ツレ	皆川 米作
大鼓	坂内 庄一
小鼓	栗城 幸子
太鼓	長谷川士希子
笛	佐藤 仁

新能「鶺鴒」の 前シテを演じて

佐藤ヨシカ

拙宅の電話が突然鳴りました。何気なく受話器を取ると、この度の新能「鶺鴒」の前シテを代つてくれとのこと。

本番まで数日、全身の凍る思いをしましたが、諸般のことを思えば受けるしかない、迷った末に意を決しました。しかし、受けては見たものの、大変急な代役でした。正直お引き受けしたことを後悔し、今までにないプレッシャーに襲われました。まずは謡の暗記からです。私の暗記の方法は「しりとり」形式で覚えめました。ワキ役洪川様やワキツレ役皆川様にも御協力いただき何とかつなげることが出来ました。型は「鶺鴒之段」という段物がありましたので、稽古時間が短いので、面をつけ装束をつけることには、自信がありませんでしたので、紋付、袴で演じる「袴能」という形式でやらせて頂きました。装束の重みを全身で感じるように運びも丁寧に演じようと心掛けました。「名残り惜しさをいかにせん」の中入の橋掛りはどのように運んで幕入りしたのかととにかく責任を果しホッとしましたことだけに残りました。



地謡 山垣 正英 二瓶 晃
 猪俣 隆二 上野 正義
 大野 篤 一条 正夫
 伏見 幸雄 星 英男
 後見 松尾 幸生 小向 哲雄
 星田 光子 角田久美子
 司會 新井田 大
 解説 増井 典子

秋の演能

十月二十七日(土)
会津能楽堂

「小督(半能)」

後シテ 坂内 庄一
 小督 渡部 妙子
 侍女 二瓶 敦子
 大鼓 船木 真一
 小鼓 折笠 成美
 小笛 星田 光子



地謡 深谷 信也 鈴木 圭介
 新井田 大 上野 正義
 渡部 孝美 一条 正夫
 星 幹男 二瓶 晃
 後見 洪川 兼三 坂内 實
 長澤 豊 秋本 征子
 佐藤 仁

いざ！お能 「小督」の笛デビュー

星田 光子

私が初めてお能のお笛を務めたのは、平成三十年秋の演能、半能「小督」である。シテ仲國は坂内氏、小督は渡部氏が務められた。お笛を担当するきっかけは、森田流お笛の師匠である寺井師から「お能のお笛をやってみませんか？」とお誘いを頂いたからである。その時は自分の勉強にもなる良い機会と思い承諾したが、後にこれが大きな苦しみともなった。お能のお笛は舞囃子とは違い格段に難しく、大変！と言うことに気付かされたのだ。「一声」、「あしらい」と覚えることは山ほどあり、「コイ合」、「ツツケ」も分らないままに時間だけが過ぎた。取りあえず「耳コピ」で乗り切る作戦を立てた。又、舞台作法も覚えなくてはならない。「手は袴の上に。大股で歩かない！」寺井師のゲキが飛ぶ。

「小督」は「あしらい」が多い。心配なので佐藤氏に後見をお願いした。本番では、さながら吉兆のささやき女将の如く「構えてー。三の六の下行きまーす！」と言った具合に。佐藤氏との連携は上手く行き、何とか無事に務め上げる事が出来た。ふり返るとお能のお笛は大変だったけど勉強になり、挑戦して良かったと思っている。今でも綺麗な月を見ると謡いたくなる。「月夜よしー。」

令和元年

春の演能

五月二十五日(土)
会津能楽堂

「胡蝶」



前シテ 栗城 幸子
後シテ 秋本 征子
ワキ 上野 正義

囃子 大鼓 平山 昇

小鼓 折笠 成美
太鼓 一条 正夫
笛 寺田林太郎

地謡 斎藤 令子 浜崎 幸子

渡部 静子 佐藤ヨシカ
遠藤ヒロ子 渡辺ヒロ子
松井 恒子 宇田 宣子

後見 渋川 兼三 小向 哲雄



第三十三回

会津鶴ヶ城新能

九月二十三日(月・祝)
会津能楽堂

「経政」

シテ 佐藤ヨシカ
ワキ 鈴木 圭介

囃子 大鼓 船木 真一

小鼓 栗城 幸子
笛 佐藤 仁

地謡 白井 治男 坂内 實

深谷 信也 折笠 成美
山垣 正英 平林 光雄
新井田 大 渋川 兼三



後見 平山 昇 二瓶 晃

司会 松尾 幸生
解説 佐藤かよ子



秋の演能

十月二十六日(土)

会津能楽堂

「土蜘蛛」



前シテ 上野 正義
 後シテ 星 幹男
 頼光 新井田 大
 小蝶 大野 篤
 従者 山垣 正英
 ワキ ヲキ 洪川 兼三
 ツレ 二瓶 晃
 ワキ ヲキ 猪俣 隆二



囃子 大鼓 坂内 庄一
 小鼓 折笠 成美
 太鼓 一条 正夫
 笛 星田 光子
 地謡 星 英男 鈴木 圭介
 山内 幸雄 平山 昇
 皆川 米作 岩淵 健一
 長澤 豊 佐藤 仁
 後見 堀 篤子 山垣美枝子
 河合 政弘 星 忠勝

能「土蜘蛛」の

シテを演じて

星 幹男

初めての役をいただいて

新井田 大

令和元年七月、宝生能楽堂で開催された「みやび会・掬水会大会」において、私は初めて能「土蜘蛛」のシテを演じましたが、そこでは多くの課題が露わになりました。それらは、会津能楽会秋の演能会に向けて私を叱咤し鼓舞する新たな課題となりました。中でも、「顰」の面を着けて謡い舞うことはまだまだ不十分でした。これに関しては、普段の練習から着装する必要性を痛感し、知己を頼って面を作製して貰い、六月頃からは面を着装しながらの練習も加えていきました。しかし、面を着けた瞬間の心もとなき、視野が狭くなることからくる恐怖心を鎮めることはなかなか難しく、まず、その感覚に慣れることが先決でした。

そんな私が二つの大会から感じ学んだことは「面を着けることは、視野のうちから自分自身の姿を消すことである。大地に確と立つ術さえ心もとなない演者は、身体感覚の浮遊をしつかりと支えるべく腰を入れる。生とは受難の連続。それを押し返していくレッスンとして舞はあるか。」という、法学者土屋氏の言に納得できました。

よりよく生きることの先に能の真髓を視る事ができるのではないかと、今後も練習に励みたいと思います。

会津能楽会の秋の演能会で、能「土蜘蛛」の頼光役をいただき演ずることができました。演ずるに当たり多くの皆様方のご指導とご支援を賜りましたことに、心より厚く感謝と御礼を申し上げます。

能舞台で能を演ずることなど、これまで想像もできませんでした。秋の演能会で「土蜘蛛」の役を頂いてからは能楽会の皆様方には演能の基本もあまり知らない私に根気強くご指導をして頂きました。お陰様で何とか舞台上に立つことができたと思っております。

演能会当日は、装束を着けて頂き待つている時間が非常に長く感じられました。お調べが響き、幕が揚がりいよいよ橋掛かりに一歩足を踏み出す瞬間は何とも言えない緊張感がありました。一歩踏み出してからは、目線、構え、足の運びなど考える余裕もなかったように感じています。一畳台に座ってからは、最初の「ことば」のタイミング、発声がうまくできるかどうか不安でした。勿論ことばを忘れる不安も常にありました。不安だらけの会津能楽堂での初舞台でしたが、お陰様で無事終えることができました。能楽会の皆様方には衷心より感謝申し上げます。良い経験をさせて頂きありがとうございます。

グループ紹介(第四回)

聡雲会

栗城 幸子

会津聡雲会は宝生流能楽師重要無形文化財総合指定野月聡師が主宰で指導される会です。平成二十三年二月が野月師の初稽古で、以来月に一度、宝生流謡・仕舞・舞囃子・お能等のお稽古を受けて参りました。稽古場は主に会津能楽堂です。

会津聡雲会の一年は一月の新年会から始まります。七月にはゆかた会、十二月に水道橋能楽堂で催される全国大会に出演して一年が終わりです。野月師をお迎えして五周年のゆかた会は東山温泉東鳳で実施。発表会も懇親会も多いに盛り上がりました。令和元年の全国大会では会津の会員が卒寿記念の仕舞を披露。他地区から「励みになったわ！私も頑張ります。」等の声が寄せられました。野月師は一人ひとりに合わせ、丁寧にご指導くださいます。私達は「次は何をお習いしよう」と、月に一度の稽古日がとても心待ちです。先生を囲んだお昼食も楽しみ！お結

びやお味噌汁、お漬物等、素朴なメニューですが野月師は笑顔で召し上がってくださいます。それが嬉しい！聡雲会はそんな会です。

喜宝会

上野 正義

会津喜宝会は郡山に指導に来られていた武田嘉永先生にお願いをし、会津まで足を運んでいただき、会員八名で昭和五十六年四月に発足しました。そして昭和六十一年九月五周年を東山温泉向瀧で行い、さらに平成四年に十周年も向瀧で行った。その時の会員数は二十名で小倉敏克先生、水上輝和先生をお招きし盛会裡に行われた。平成三年七月には初めて仙台郡山会津の合同喜宝会が梅屋敷で開催された。

その後、嘉永先生(平成六年十一月二十二日没)が体調を崩されたことから、武田孝史先生が平成六年に稽古に来られ現在に至っている。ここ数年の稽古は年十回程で、会員は五名と小人数になってしまった。

七月に「会津仙台郡山の合同謡曲ゆかた会」を持ち回りで開催している。令和元年は郡山の当番で石川町八幡屋で行われた。最近では東京の会員や武田先生のお嬢さんである伊左先生主宰の喜祥会の方々も参加されて行われている。

数年前には毎年行われている九州大会に女性会員が参加をした。例年十一月二十三日は宝生能楽堂で喜宝会、喜祥会が開催される。令和二年の第二十九回合同ゆかた会は七月二十三日に東山温泉御宿東鳳で開催の予定となっている。

一声会

佐藤かよ子

一声会は今年創立六十七年となりました。現在の会員は十六名で、会長湯田眞佐弘先生の御指導の下、活動しています。

活動としては、会としての独自の事業のほか、会津能楽会及び会津観世流連合会と連携事業があります。春の連合会謡曲・仕舞大会に始まり、春季演能大会、秋は、薪能・福島県観世流謡曲大会・秋季演能大会、下郷町芸能祭への出演協力、そして暮れの納会で終わります。毎月一回、東京から北浪昭雄先生

にお出でいただき、能楽堂と湯田眞佐弘先生宅で二日にわたり、謡と仕舞の稽古をしています。ここ四、五年で下郷町を中心に会員が増え、これから活動充実が楽しみです。

私事になりますが、今年度、会津能楽会に入会させていただきました。薪能の「経政」の解説という大役を務めさせていただきます。能楽会の諸先生方に御指導いただきながら何とか原稿をまとめ、能楽堂の舞台の端に立った時は、緊張よりも感動の気持ちでいっぱいでした。能楽という素晴らしい世界の入口に立った今、能楽をもっともっと深く知るため、たくさん稽古に励みたいと思っております。



「藤」後シテを演じて

佐藤 文江

私は、宝生流 芳齋会に所属しています。住居は、中通りの二本松市で、会津までは車で片道約九十分を要します。二十年程前、御縁がありまして、佐藤ヨシカ氏に師事することとなり、その後、能楽会の入会となりました。

能のひびき

まだまだ未熟な私に、春の演能会「藤」の後シテの声を掛けていただきました。前シテは大先輩の方でした。準備は五月、しかも会津行きは雪との戦いでした。型ツケは届きましたが、なかなか思うように行かず、一月二月と月日ばかり流れイライラの毎日でした。冬の晴れ間に師宅へ伺いますとダメ出しばかりです。ヤッパリとは思いますが。そしてクリアして又会津行き又又ガツウーンそれを繰り返しておりますと、もう春でした。いよいよ第一回目の申し合わせ。会津能楽堂の橋掛りに面をつけて立つのは初めてで、面を通しての光に慣れるまでしばし時間が必要でした。二回目は装束をつけていただき、囃子も取れるようにな

り、地謡の方々に助けて頂き留拍子まで床に足がついているか心配でした。当日が来てしまいました。晴天、青空、作り物の藤棚より、前シテが優雅に橋掛りを戻り、バトンタッチです。大口に大袖の装束をつけていただき、鏡の間に入りました。

五色幕の前に立った時は、涙をこらえるのに必死でした。どれ程多くの方々にささえられて、ここに立っているのか実感でき感動でした。ひとつの事を成すために、能楽会会員皆様の手や足をわずらわせ迎えた本番でした。

この上は私にできることは、囃子や地の方々と一緒に会津の地に根をはる「藤」をしっかりと演じることだと思えました。角柱に向かいますと見所の後に生えるニセアカシアの、白い花びらがチラチラと舞い散り私達を応援しているようでした。舞台に出て行く時は不安だった橋掛りも、「序の舞」を舞いおさめキリ留拍子を踏んで、はればれと戻ってくる私をたくさんの方が出迎えてくださいました。この方々のお陰で又ひとつ成しとげることができたと深い達成感が湧きあがってきました。本当に人間と人間の力に感謝することができた「藤」でした。ありがとうございました。



暗記の工夫

鈴木 圭介

経政のワキ役は、数年前にも出演している。

八月に入り暗記力を確認すると、すっかり忘れていた。これが八十三才の現実、記憶力の減退は否めない。九月に入り、寸暇を惜しみ、菜園畑や車庫の中、風呂場やトイレなどで暗記に励んだ。効果があつたことを述べる三点になる。

①、謡曲文中の語句を意味不明の儘にしないこと。

具体例をあげると、三頁の「御知遇」を曖昧に理解していたために「ましてや多年の御知遇。恵みを深くか

けまくも。かたじけなくも」を「ましてや多年の御恵み」と幾度となく御知遇が抜けた。知遇と恵みを漠然と同じ意味と感じていたからである。

②、謡曲文に仕組まれている「懸けことば」を探し暗記に役立たせる。例えば、仁和寺と大納言の二つが出なかった。中間音の「な」を共通音とする自分なりの関連付である。探せば外にも沢山ある。

③、句の始めの接続詞の順番を暗記して「飛ばし」を避けた。

③の例として、冒頭より三頁にわたる長い文では、接続詞の「是は」、「さて」、「未だ」、「然るに」、「又」、「彼の」などと暗記したら、間違いが激減した。また、幽霊の表現には、「あるかなきかに見え給う」から「又、消え消えと形もなくて」となり、問答では「(シテ)あるかと見れば、(ワキ)又見えませで、(シテ)あるか、(ワキ)なきかに」このあとすぐに、ワキ「経政の幽霊、形は消え、声は残って」と表現が変化している。分析すれば納得できるが、丸暗記では間違いやすい。次の語句が出やすいように前に関連付けを探すことである。謡曲文には日本文化の特有の「言葉遊び」が仕込まれている。そこに気がつけば暗記は楽しく老化防止にもなる。老を楽しみましょう。

根ざし行く育成委員会活動

能教室等の実施状況 平成三十年度

月・日 学校等 学年・人数

3・18 伝統文化であそぼっ 子供15人大人10人 ※

5・3 子供まつり ※ 子供56人大人76人

6・6 城北小 ※ 六年生73人

6・6 城西小 ※ 六年生96人

6・6 大戸小 ※ 五年生21人

6・6 一箕小 ※ 六年生56人

6・6 一箕小 ※ 六年生55人

7・7 行仁小 ※ 六年生61人

7・7 神指小 ※ 六年生17人

7・7 河東学園小 ※ 六年生79人

7・7 日新小 ※ 六年生63人

郡山市名倉公民館 ※ 一般35人

会津地区音楽教師学鳳高 ※ 一般20人

8・3 坂下東小 ※ 六年生59人

8・8 荒館小 ※ 六年生18人

9・9 永和小 ※ 六年生53人

9・9 フレンド講座 ※ 六年生18人

郡山ビッグアイ ※ 一般25人

9・9 ワークショップ ※ 一般8人

10・10 城南小 ※ 六年生76人

10・10 謹教小 ※ 六年生58人

10・10 松長小 ※ 六年生49人

11・11 鶴城小 ※ 六年生43人

11・11 坂下南小 ※ 六年生75人

11・11 小金井小 ※ 六年生99人

12・11 安積第三小 ※ 六年生68人

12・23 大戸中 ※ 三年生11人



教育研究会で舞囃子の発表

平山 昇

平成十七年以来多くの人に「能」への興味関心を持ってもらうよう小学校での能教室や子供対象の行事さらに社会人向けのワークショップなどを実施してきた。年によっては小・中・高の音楽の先生方や公民館からの申し込みにも応じてきた。今年特筆すべきことは会津地区の高校の音楽の先生方が昨年実施した育成会の講座をきっかけに、東北の音楽教育研究大会で「能楽の研究（会津に根づく伝統文化）」を福島音楽堂で発表したことである。全員初めてとのことであったが小謡「高砂や」と舞囃子「羽衣キリ」のシテ、地謡、囃子について学び、稽古した結果を実演披露した。舞囃子のシテは職分の水上先生の指導を受け、小鼓のことについては幸先生に指導助言を受けた。地謡と囃子は育成会員が稽古を支援した。実演は短期間の稽古にもかかわらず実に見事であった。また羽衣キリの地謡を担当者が会場で楽譜を用いて指導していたが参加者は数回の練習でしっかりと謡い上げていた。また、配付された研究レポートには「能」の解説や高砂・羽衣のあらすじ・謡の発声法とリズム（七五調と八拍子等）さらに能の授業での指導法的確にまとめられ、会津の能の事情についても克明に記載されていた。

この行事を通して教育現場での能についての関心の高まりを感じた。

12121111	11	1111	1110	10	1010	1010	9 9	9 8	8 7	7 7	6 6	6 6	令和元年	5 4	平成三十一年令和元年度														
10 4 2214	7	6 5	1 30	23	21 16	6 4	19 12	1 28	20 18	16 4	27	26 21 4	子供まつり 子供168人・大人149人	3 25	一箕小 ※ 六年生 60人														
フロンティア 社会人25人	安積第三小 六年生65人	小井小 六年生114人	坂下東小 六年生155人	会津地区音楽教師12人	高教研東北大会発表援助	福島音楽堂	高教研東北大会発表援助	両沼・耶麻中教師9人	坂下南小 六年生52人	葵同窓館 自主研修	大戸小 五年生23人 六年生46人	鶴城小 高教研参観	幸師指導助言13人	会津地区高教研葵同窓館	謹教小 六年生50人	城南小 六年生80人	ワークショップ	永和小 六年生13人	会津地区高教研葵同窓館	荒館小 六年生38人	日本文化に親しもう	神指小 六年生17人	城西小 六年生84人	河東学園小 六年生76人	会津地区高教研葵同窓館	松長小 六年生43人	日新小 六年生49人	安積第一小 四年生94人	その他参加者多数



一陽来復の春を迎えます。

松井 恒子

十二月十日の能楽教室を最後に令和元年の全講座が終了いたしました。

主に会津若松市内の小学校に会津坂下町の二校を加え全十八校と九月の『ワークショップ』十月の『日本文化に親しもう』も多くの方々に楽しんで頂きました。子供達は大規模校小規模校それぞれ個性豊かに、主に六年生を中心に指導いたしました。

能楽の歴史から始まり、「観阿弥!!世阿弥!!」と元気な声が響きます。育成部会員の実演による謡・仕舞・舞囃子等を紹介し、楽器や面の説明・謡の指導・各楽器の体験と限られた時間はあつという間に過ぎていきます。私は主に小鼓を担当いたしました。小鼓を構えると皆興味津々に見つめます。一番嬉しく思うのは「ヨォーポン」と小鼓を打った後、子供達の素直な「ホォー!!」と驚きと感嘆の聲が上がる時です。ほぼ全員の子供達がお能を観賞したことも楽器にふれたこともなく、指導が終わった後に「楽しかったです!!面白かったです!!」と笑顔で感想を伝えてくれる時、疲れが吹き飛びます。能楽を通して伝統文化の一端を伝え子供達の真摯な姿に接して、私達にも大きな喜びが返ってきます。新しい年も緊張の中にも心弾む出合いを夢想し、本年中携わって下さった皆様に深く感謝申し上げます。

繫ぐ

堀 篤子

日頃仕事に追われている若い友人が、その日はぼつかり時間があいて、「薪能」を観にやってきました。能楽堂を見るのははじめて、観能もはじめてでした。翌朝SMSで届いた感想には「気を張って観ているうちに、木々を渡る風の音が謡にハマったせいか心地よくなり、寝てしまいました。しかし目覚めてすっきり。『経政』には魅せられました。激しい動きのなかで上衣（長絹）ネットで調べた！」の袖をひらりとさばくシテさんの姿に品格を感じました。また行きます」とありました。能楽ファンがひとり誕生した日でした。

まだ平成だった昨年の春、装束着付部キャップの役を小野木和子さんから受け継ぎました。これまでも「装束調べ」「虫干し」のたびに見事な、しかし痛みが進んでいく能装束を前にして、これらで舞った先人を想い、つくるつてくださった方々を想い起しましたが、新しい立場にあつてさらに想いを深くし、会津能楽のこころとわざを繋いでいくことのむずかしさをひしひしと感じています。

小野木さんの提案で、四、五年前

から「申合せ」の午前中に着付け勉強会が行われています。能装束着付けの技術を学ぶことを通して小野木さんの深い識見に触れる機会であります。お仕度は、演者が気持ち良く舞台を務めるために①動きやすく、②着くずれせず、しかも美しく仕上げなければなりません。そのわざを部員が身に付けていくことは、とりもなおさず先人が残した能装束を生かすところを身に付けることなのだと、小野木さんはそれとなく説かれるのです。

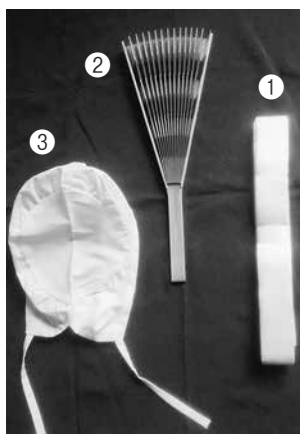
能楽堂の装束庫に収められた品々の中に、金糸・銀糸をふんだんに使い、あざやか図柄を織りなしたものにまじって、地模様のみのもので作った鬘帯が何本かあります。ツレが縮める鬘帯です。各時代の先輩方が、若い女人役の頭上を飾るために——しかしシテと同じであつてはならず、着古したがなお美しい柄の着物を倒してこしらえたのだと聞きました。

「唐織の製作」を部員の方々に相談したとき、私の胸の奥にこの「鬘帯の製作」のエピソードがありました。古い帯をほどこき、その布地で唐織を作りたい。伝統芸能の貴重な財産をたいせつに護りながら、かつ、能楽の充実・普及を図ろうとするならば新しい唐織の存在は欠かせないと考えました。

しかし今どき、織元に高価な新品を注文することなどできるはずがありません。私たちの今の力でやれる方法を探ろうということになり、古物だがすてきな図柄の丸帯三本を発見し、買い求めました。現在はほどきが完了し、専門家が懇切丁寧にシミを抜いている段階です。相当の間が必要らしく、唐織の完成をみるのは数年先になりそうですが、披露の日を想うだけで心が躍ります。

いつの頃からでしょうか、「薪能」などの見所に家族づれや遠来の客が増えてきました。実にうれしく、はげみになるできごとです。訪れる人々の期待にそむかないためにも、部員一同身を引き締め、精進してまいると思います。

新しくなった諸装具



①鉢巻
②中啓
③インナーキャップ
(カツラの下に着ける)

私と謡と観世流

角田久美子

私が初めて就いた先生は、観世流師範、志賀幸子師です。

謡、仕舞の外に、囃子方としても活躍されていらっしゃいました。

演能会は、宝生流の行事でしたが、古川義夫先生の御尽力により、観世流も参加して行うようになったと志賀先生にお聞きしました。観世流も一時は七十八名にもなり、会派は五組あり、それぞれに活動をしていました。観世流として年に二回、二月の新年会、七月の夏期研修会を梅屋敷で行い活気があり賑わっていました。現在は、二組となり寂しい限りです。私が謡を始めた頃の思い出は、先生が一人、生徒が五人で全員がお姑様のような年令の方々がかりで半分ガツカリもしましたが、先生が熱心、丁寧に教えて下さりやる気が出ました。『そろそろ仕舞も始めましょう』と先生から言われて、私は舞は苦手なのでお断りしました。すると志賀先生が『素うどんも美味しいよ』と松枝先生のお言葉ですと言われて仕舞も始めました。その外に仕舞の地謡や地頭の謡かたも習った。又笛を勧められ上手く吹けずにいる時に、大鼓の方からも誘われま



した。以前先生から『太鼓をするの大ノリが出来、リズムがとれるよ』と言われた言葉を思い出し、太鼓も大鼓も一緒と思ひ、笛が上手くなれるならと大鼓に入会しました。これが又大変で、わからぬままに時が過ぎて行きました。その頃金沢の『大鼓の会』に参加している先輩方に誘われて何もわからぬままに、共に毎年参加しました。舞台上上がる事により少しずつわかって来て金沢の舞台が目標となり楽しみでもありました。止めてから八年、そして大鼓をまた始めました。あの頃を思い出し能楽を楽しみながら続けて行けたらと思います。

会津能楽囃子会の動き

▽第二十九回会津能楽囃子会

平成三十年三月十日(土)

会場 伊東舞台

午前十時三十分始

番組

舞囃子 高砂他十四曲

▽第三十回会津能楽囃子会

平成三十一年三月九日(土)

会場 伊東舞台 午前十一時始

番組

舞囃子 志賀他十二曲

独調 田村クセ

連管 ハタラク

囃子会は年一回三月第二週の土日いずれかに開催している。選曲と会員の出演曲目を決めるために実行委員会を開いている。この会議で毎年十五曲程度を選曲し、これを素案として各グループ代表者が出欠と出番の了解確認を行う。その結果、囃子方に欠席者が出るとそのやりくりが大変になる。

年々会員が減少していることから今後の在り方として曲数を減らすことも必要である。囃子の四拍子・謡の習得は日々研鑽する以外に近道はない。会員が囃子会参加を負担と感じる事も避けなければならない。

囃子会が楽しい研修の場であることを第一に考えて、今後の在り方を検討してゆきたい。

会員数は令和元年十二月現在四十名となっている。

事務局 上野 正義

和楽会の動き

▽第一一八回和楽会

平成三十年四月二十二日(日)

会場 会津能楽堂 午前十時始

参加 六団体

番組

素謡 松尾他七曲 連吟 船橋

仕舞 経政他七曲

独鼓 大鼓 中ノ舞

独鼓 小鼓 鶴亀・羽衣クセ

▽第一一九回和楽会

平成三十一年四月二十八日(日)

会場 会津能楽堂 午前十時始

参加 七団体

番組

素謡 国栖他九曲

仕舞 班女他七曲

独鼓 大鼓 東北クセ

独鼓 小鼓 玉ノ段

年一回会津能楽堂において和楽会の開催、流儀の底辺を広める役目を托された(宝生流教授囑託免除保持

者、観世流も同じように宗家のお許しを頂いた方が、自分の会を開いてそれぞれに稽古に励まれています。

和楽会当日は、各会協力して能楽堂雨戸の開閉等外回りの準備と舞台掃除を行います。また当番制で当日の運営を行い、見台の出し入れやお弁当の配布等、会が終わるまで役割があります。

次回の和楽会は第一二〇回大会で令和二年四月二十六日(日)に行われます。多くの方の出演をお願いします。

なお現在の加盟団体ならびに会主代表者および役員は次のとおりです。

▽(敬称略 五十音順)

一鼓会(坂内庄一)

幸栄会(栗城幸子)

松晴会(松川善之助)

拍々会(代表中村寿男)

芳馨会(佐藤ヨシカ)

宝成会(折笠成美)

謡友会(上野正義)

会津観世流連合会(湯田眞佐弘)

▽(役員)

会長 佐藤ヨシカ

幹事(会計) 星 幹男

幹事(庶務) 古田豊子

幹事(庶務) 坂内庄一

会長 佐藤ヨシカ

幹事(会計) 星 幹男

幹事(庶務) 古田豊子

幹事(庶務) 坂内庄一

会長 佐藤ヨシカ

役員名簿

平成三十年二月現在

会長	佐藤 ヨシカ
副会長	湯田 眞佐弘
理事	折笠 成美
平山 昇	
上野 正義	(事務局長)
玉川 おくに	(庶務)
渋川 兼三	(庶務)
栗城 幸子	(会計)
坂内 庄一	(会計)
鈴木 圭介	
一条 正夫	
小野木 和子	
角田 久美子	
堀 篤子	
渡部 妙子	
河合 政弘	
監事	

◎委員会構成 (代表者)

- 演能企画委員会 折笠 成美
- 財産管理委員会 一条 正夫
- 能装束着付部 小野木 和子
- 広報委員会 湯田 眞佐弘
- ホームページ作成委員会 鈴木 圭介
- 会報作成委員会 鈴木 圭介
- 育成委員会 平山 昇

平成三十一年二月現在

会長	湯田 眞佐弘
副会長	折笠 成美
理事	上野 正義
平山 昇	
上野 正義	(事務局長)
渋川 兼三	(庶務)
栗城 幸子	(会計)
坂内 庄一	(会計)
佐藤 ヨシカ	
鈴木 圭介	
一条 正夫	
小野木 和子	
角田 久美子	
堀 篤子	
佐藤 仁	
渡部 妙子	
河合 政弘	
監事	

◎委員会構成 (代表者)

- 演能企画委員会 折笠 成美
- 財産管理委員会 一条 正夫
- 能装束着付部 堀 篤子
- 広報委員会 河合 政弘
- ホームページ作成委員会 鈴木 圭介
- 会報作成委員会 佐藤 仁
- 育成委員会 平山 昇

「その他」の情報

▼能楽会員の状況

平成三十一年一月現在 七十七名
令和二年一月現在 六十九名

入会者 五名

- 村越 洋子 佐藤 一夫
- 星 忠勝 佐藤 かよ子
- 星 安博

退会者 十四名

- 相田 幸三 渡部 孝美
- 広谷 元子 安西 久子
- 石田セツ子 横田 源一
- 佐藤 信英 高瀬 恵子
- 伏見 幸雄 平林 光雄
- 小林 忠 栗城 二郎
- 荒川 勝 小向 哲雄
- 物故者 二名 小貫 敏明
- 玉川おくに

▼受贈

平成三十年
▽能面 小癒見(鶺鴒で使用)
寄贈者 遠藤 敬一様

▽頭巾 二枚(白色)
寄贈者 佐藤ヨシカ様

▼寄付

令和元年
▽金二万円(退会に伴う寄付)
寄付者 平林 光雄様

▼購入品

令和元年
▽中啓 二本(ワキ用)
▽はち巻 二本(正絹)
▽丸帯 三本(中古帯)

編集後記

○会長の挨拶にもありましたように積雪の遅い冬となりました。空気にも雪国特有の鋭い冷感がまだ感じら

れません。季節が後ろにずれ込んでいくような気がします。雪に閉ざされる季節が短いのはありがたいところです。

○会報第9号をお届けします。昨年は能楽堂竣工十周年でした。隔年刊行であるため一年遅れの、平成と令和に跨る記念号となりました。

○平成三十年度は薪能「鶺鴒」の前シテが急遽代役となり、装束を着けなりました。あまり前例のないことでしたので、演者の佐藤ヨシカさんにご感想を寄せていただき、記録に残すことにしました。

○令和元年度の「春の演能会」は、令和になって初めての演能会となりました。能「胡蝶」は期せずして新しい年号を寿ぐ温かな演目になったことを慶びたいと思います。

○その他、一年間に亘つての素謡い・仕舞・舞囃子は多彩な演目となりました。出来るだけ多くの方々の感想随想を記録し後世につたえることを心掛けて編集しました。

○原稿は大変順調に集まりました。ご多忙のところご協力いただきました皆様には改めてお礼を申し上げます。と思います。

○皆様のご精進とご健康をお祈りいたします。

- 佐藤 仁 鈴木 圭介
- 上野 正義 石田 桂子
- 増井 典子 角田 久美子

